

佐伯地方の氏姓 (三)

佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長)

私たちの苗字は明治三年九月、太政官布告で平民も苗

字を名乗ることができるようになり、同四年三月、戸籍法が実施され、同五年からいわゆる壬申戸籍の登録が行なわれて、これまで百姓某であった農漁民も、商人も、それぞれの苗字を造り、何氏何某と所属町村の戸籍簿に登録した。しかし、当初の戸籍編成事務はなかなかスムーズに進捗しなかったようで、明治八年二月さらに「自今必ず苗字を相唱うべく、もつとも祖先の苗字不明分の向は新たに苗字を設くべし」という太政官布告がでてい

る。鶴谷外史（故佐藤蔵太郎翁）の話によると、佐伯地方の戸籍登録がはじまったのは明治八年ごろからという。この布告にもあるように、百姓であっても古い家々は祖先から伝えられた私称の苗字があったが、二百七十余年におよぶ幕藩体制下の下積み生活で、祖先の苗字が判らなくなった者も多かった。これらに対して当局は新

しい苗字を造らせたのである。

ところがもう一つ問題があった。それは武家や学者など中流以上の有識者であるが、藩政時代には婦人は嫁しても生家の苗字を名乗った。佐伯藩を例にとると、六代高慶の正室は宗氏であり、八代高標の正室は加藤氏であった。また高慶の宿老である益田令治（のりはら金兵衛）の妻は沼氏、幕末の佐伯藩有志矢野光儀の妻は佐久間氏（矢野龍溪の母）、漢詩人中島子玉の妻は宇野氏、儒臣高妻芳洲の妻は吉田氏であった。

御一新を目指した明治政府はこの慣習を破ることができなかつたので、明治九年三月の布告で「婦女人に嫁するもなお所生の氏を用ゆべし。但し夫の家を相続したる上は夫家の氏を称すべき事」と指令、暫定的にこの慣習を認めた。そのため妻の氏（苗字）が夫と同一になったのは明治三十一年七月に制定された民法からである。も

つとも現在は新憲法下の民法で、結婚した男女は夫妻どちらの苗字を称してもよいが、別々であってはならないと決められている。私たちの苗字はこうしたいきさつがあつて決り、また造られたのである。

◇

さて、前号に続いて佐伯地方に多い苗字を探究しよう。集計第二位は河野氏であるが、この河野氏は「こうの」あるいは「かわの」と読み、佐伯地方では「かわの」と読む方が多いようだ。しかし、「こうの」も「かわの」も同族のようで、河野氏はいずれも伊豫河野党の流として、越智姓河野氏を称している。

河野氏は神武天皇の皇子神八井耳命の末裔である伊豫国造くひのくにの後で、伊豫国風早郡河野から起こった伊豫第一の大族であるが、一方、越智・河野系図によると、孝靈天皇の裔で越智郡大領であつた越智益射たまきの後と伝え、伊与大領越智玉興の子玉澄の後が河野党で、玉澄たまずみの弟玉守の末が新居党になつたという。もっとも系譜学では河野氏は物部氏族越智氏流で伊豫風早郡河野郷から起こつた地方豪族である。

河野氏が史上に名を出すのは源平合戦からで、伊豫水軍をひきいた河野通清・通信父子が活躍する。通信の曾

孫六郎通有は元寇のさいの勇士である。以来河野党十八家の水軍は名声をあげ、瀬戸内海の海上権を掌握した。

河野十八家とは今岡・富岡・土居・得能・重見・森山・平岡・南・新居・来島・高市・今井・大井・徳永・石川・石井・久米・桜井の各氏である。この河野一族は本名に「通」の字を通字とした。武家が本名に通字を使ったのはだいたい鎌倉時代からの風習で、豊後の豪族では大神一族（緒方・佐伯・阿南・大津留各氏）の「惟」、日田大蔵氏の「永」、玖珠清原氏の「通」などが有名である。

河野氏には伊豫河野氏のほかに武蔵河野氏があるが、これは桓武平氏秩父氏族小山田有重の後吉次が河野氏の縁につながるため称したものだ。また相模河野氏は時宗開祖一遍上人（河野通信の孫）に従つて相模国に移つた一族で北条氏に仕えたものという。

ところで佐伯地方の河野氏は永享七年（一四三五）の姫嶽合戦で討死した河野通久の子教通（通直）が恩賞として臼杵荘を宛行われたため、その一族が海部郡に移つたといわれ、また教通の孫通直や通久の次男通泰（通安）が河野氏の没落によって佐伯地方（八戸・上神野・宇藤木・床木・大坂本・蒲戸・蒲江各地域）に遁れて来たといわれている。

『豊府聞書』永享七年夏、大守持直及親綱、大將軍の命に背く有り。此故に大樹義教大に怒り、防州大内氏、豫州河野刑部大輔通久をして、豊後大友家に往かしむ。時に大友持直等、国中の兵士に命じ、軍事を相議し、同国海部郡姫嶽に拒戦す。同六月廿九日河野通久力戦して死す。(行年二十九、瑞雲院と云う)是時大友家臣若林弾正忠戦功あり。同七月持直親綱と胥議し、管領畠山等に依り柳宮に降を請う。義教大將軍之を宥す。本領旧の如し。(『雉城雜志』による)

將軍義教は戦死した河野通久に対する恩賞として、子犬正丸(教通)に臼杵莊を宛行つたが、大友氏がこれに応じなかつたので、寛正元年(一四六〇)十二月、教通はこのことを幕府に訴えた。しかし、大友親繁は同二年八月、反論してゆぜらず。いつしか有耶無耶になった。(『大分県の歴史』・その他)

河野氏が佐伯地方で「かわの」と読まれていることは前述した。そして河野姓の分布圏に川野姓が多く、同氏族であることを推測できるような形になっている。姓氏家系辞書には伊勢に川乃氏があるが、これは物部氏族越

智氏流河野氏の庶族ということになっている。新居系図によると、上大夫新居為世の弟に下大夫川乃為時があり、河野氏が川乃氏(川野氏)と改めることも強ち無理ではないようだ。『太平記』巻八・第十四に河野を川野と記述した例がある。

『太平記卷八』(六波羅方は)河野九郎左衛門尉(通治か)、陶山次郎に二千余騎を差し副て蓮華王院へ向けられけり。

陶山、川野に向つていひけるは、外様の勢二千余騎をば塩小路の道場前へ差遣し、川野が勢三百余騎、陶山が勢百五十騎は引分けて蓮華王院の東へぞ廻りける。(同条につつき川野と記されたところが三か所ある)

『太平記卷十四』伊豫に川野対馬入道(河野対馬守通治か)長門に厚東一族、安芸に熊谷、周防に大内介が一類云々。

このように河野姓と川野姓はほぼ同姓異字の形で使用されている。集計では川野氏は第六位だが、同じく「かわの」と読んでいるから河野・川野の両氏を合せると、渡辺氏以上の概数になり、佐伯地方第一の苗字ということになる。そこで河野・川野両氏を同一氏族と見て、越智氏流河野氏の略系を掲げておこう。

○(四郎・河野介) 河野通清―通信―通広―智氏(一遍上人)

通久 (六郎・対馬守)
通継―通有―通盛―通朝―通堯
(通久の後を継ぐ) (初め通治) (初め通堯)

通能 (刑部大輔)
通能―通久―教通―通宣―通直……
(姫岳で戦死) (初名通直)

この略系にのせることはできなかったが、河野氏は通堯の子通能(通義)は惣領家で本家を称し、弟通之は予州家を称して本家に対抗した。姫嶽合戦で戦死した通久の子教通(犬正丸・通直)は將軍義教から恩賞として臼杵荘を宛行われたが、二十数年後に大友氏に回収された。しかし、このとき河野氏の一族が豊後に渡って来たらしく、各所に河野氏の子孫が残っている。『大分県の歴史』佐伯市内にも河野氏は相当あるが、ほとんどが「かわの」と読んでいる。『佐伯茶飲話』に、塩屋村庄屋佐藤新左衛門は藩士坂本頼兵衛(名は永慶)の引立てに助力したため、藩祖毛利高政にその器量を認められて、河野茂右衛門と改名、領分中の惣庄屋を命ぜられた。この河野氏も「こうの」でなく「かわの」である。

『大友興廢記』や『梅牟礼実録』(ともに劍の巻)に

載っている佐伯宗天(紀伊守惟教)の家中名は、佐伯地方の姓氏を記録したもとも古いものであるが、軍記類という本の性質上、その説話の信憑性は薄い。しかし、姓氏つまり苗字についていえば、この記述者が父祖・先輩から伝え聞いたものが多いから、佐伯氏縁故(佐伯地方に残っている)の苗字であるといつてよい。

さて、『興廢記』や『梅牟礼実録』によると、日向・高城の戦で討死した宗天家中の侍に川野大蔵がある。この川野一族が佐伯氏没落後どうなったかは不明であるが、弥生町・本匠村・蒲江町等に川野姓が多いことを考えると、川野一族はそれぞれ所を得て帰農したものであろう。しかし、蒲江町の川野姓については紀州熊野から移住したという七軒株の伝説がある。それは蒲江の鎮守王子神社の伝承で、七軒株とは米田・川野・山野・佐藤・広瀬の各氏が持っている氏子株らしいが、このうち川野氏は三軒で三株を持っている。また天正年間に伊豫の河野通直(惣領家)が滅亡したとき、一族の河野通安は難を避けて蒲江浦に移居したが、その時通安に従って来た人々に、川野・清家・浜野・吉田・小野・白岩・淡浪・柳川の各氏があったという。

佐伯藩毛利氏の家士には河野氏はなく、川野氏（中小姓）が二家ある。七代高丘のとき、徒士に川野本兵衛という者があったが、大坪流の馬術に秀れ、奔馬の鞍上に立って鉄砲を放ち、よく的をうち砕いたという。川野本兵衛は高丘に登用されて中小姓に進んだが、高標（八代）のとき給人格となった。

また川野氏には藩領中野村の大庄屋川野宇左衛門（安政中は字八郎）があり、河野氏には天領堅田村泥谷の河野氏、同天領床木村の庄屋河野氏があるが、堅田河野氏は伊豫の人河野左馬助の後、床木の河野氏は河野通能（字州家）の後と伝えている。



折敷に縮三字



折敷に三文字

河野氏の家紋は「折敷に三文字」俗に隅切角に三文字という。『寛政重修系譜』によると、河野庶流二十三家いずれも「折敷に三文字」または「宇津巻」を家紋にする。豊後七藩のうち臼杵藩稻葉氏、森藩久留島氏とともに河野氏の庶流「折敷に三文字」を定紋にしている。この折敷に三文字は大三島明神の神紋

で、河野水軍が同神社を氏神として信仰、神紋を一族の家紋とした。佐伯地方の河野氏・川野氏はいずれも「折敷に三文字」を家紋にしているが、ほかに河野氏流という神野氏も同紋を用いている。



次は矢野氏である。矢野姓は佐伯市にも多いが聚落的にまとまっていない。郡部では宇目町（全地域）、弥生町床木地域に多く、また直川・本匠両村には散在している。矢野の地名は全国各地にあるが、とくに著名なのは播磨国赤穂郡矢野庄（兵庫県相生市）である。このほか庄園関係には備後国甲奴郡矢野庄（広島県甲奴郡上下町）伊豫国喜多郡矢野保（八幡浜市矢野町）、伊勢国安芸郡八野^{ヤノ}厨（三重県鈴鹿市）等がある。大分県内の地名では玖珠郡萩ヶ原に矢野邑（玖珠町）があり、その付近の魚返には玖珠清原氏の発祥伝説がある。

大友氏の祖左近将監能直は伝承では建久七年（一一九六）三月、豊後国に下向したことになるが、このとき能直に随従した鎌倉武士に大友十二筋といわれる首藤・佐藤・衛藤・後藤・矢野・高山・舞・林・甲斐瀬らの諸氏がある。（『大分郡志』より）それでは大友氏に

随従して豊後に入った矢野氏はどういう系統の氏だろうか。

鎌倉幕府を開いた源頼朝の重臣で、問註所執事となつた三善康信の孫行倫の子倫重は矢野外記大夫と号して、三善氏族矢野氏の祖となっている。また清和源氏山県三郎国直の孫頼清の子上有智頼資の次子蔵人頼保は播磨国矢野庄下司となり、矢野氏を称した。これらの矢野氏はいずれも鎌倉中期に起っているから能直の従士でなく、若し大友世臣として下向したとすれば、元寇文永の役に際して三代頼泰に従つて下つたものであろう。

佐伯氏の家士にも矢野氏が多い。惟治の家臣に矢野左兵衛・同与五郎・同弥七の名があり、宗天（惟教）家中に矢野大隅・同与市兵衛・同弥十郎・同左助の名が見える。（『梅牟礼実録』）また惟定のとき、堅田合戦に奮戦した矢野美作・同大炊介父子がある。これら佐伯氏に仕えた矢野氏、あるいは宇目郷や弥生町床木地域にある矢野氏は何処に発祥し、起原をもつ氏族であらうか。

前述した伊豫喜多郡矢野保は越智氏族新居氏流矢野氏の発祥地である。佐伯氏と伊豫地の関係は、かつて私が『佐伯史談』で論じたように非常に親密なものがある。

大友氏に謀叛した佐伯惟治が最後に遁れようとしたのは伊豫地であり、惟治の従子（甥）惟勝と惟常は不和で争い、敗れた方が必ずといってよいほど伊豫に逃亡した。また大友家中の百姓の争いで、佐伯を退去した惟教が十余年間流寓したのも伊豫地であった。佐伯と伊豫の関係が深いのは往昔からのことで、天慶の乱に藤原純友の次将だった佐伯の是基は佐伯庄や伊豫の日振島を根拠にして、豊後・日向・土佐の沿岸を荒しまわった。これは伝承される一つの史話にすぎないが、おそらく佐伯灣岸に居住する海民は向う隣に行くような気持で、豊後水道を渡り伊豫に航したであろう。また宇和板島の漁民や現在の八幡浜市々域にある矢野保の住民も、いつの頃か佐伯地方に移り住んだことであろう。そしてそのなかには河野氏が佐伯地方に移つた事情と同様の経路を辿つて豊後に渡航した越智一族の矢野氏もあつたはずである。

天保年中の『佐伯藩御家中席帳』によると、佐伯藩士に矢野氏が二家ある。すなわち郡代格預所頭取という藩重役の矢野多門、給人格の矢野哲也、徒士の矢野作之丞であるが、矢野多門と同哲也は父子で同家である。（矢野多門は龍溪矢野文雄の祖父、哲也は父光儀のこと。）

渡辺三男著『日本の苗字』に矢野姓の知名人として矢野龍溪をあげ、統計院幹事兼太政官大書記官矢野文雄（豊後佐伯の人、別号龍溪、政治小説『経国美談』・『浮城物語』などの作がある）玖珠郡矢野から起ったと察せられる豊後の豪族矢野氏は大友氏の一族」と記述している。立憲改進黨の領袖として明治政府に煙たがられ、時には政府の要職についた矢野龍溪の紹介はよいとしても、この矢野氏を豊後の豪族で大友一族とするのはどうかと思ふ。

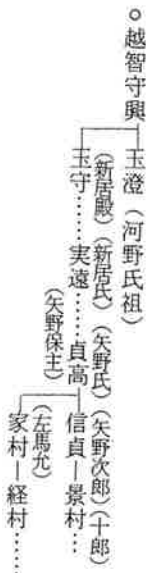
龍溪矢野文雄の系統は、佐伯藩祖毛利高政に従って日田から佐伯に移って来た家といわれ、四代矢野安太夫のとき、その学才を寛龍公高標に知られ、寛政二年（一七九〇）藩子弟の教育掛となり、同五年学問所（四教室）講師になった。この安太夫が河童教化の逸話を残した黙齋先生である。黙齋以後、矢野家は給人格として上士に准じ、黙齋の孫多門にいたって藩の重職についた。龍溪は多門の長男程蔵光儀（哲也）の長男である。

宇目郷の矢野氏は南田原の鷹鳥屋神社を祖神とする一族である。鷹鳥屋神社々家の世伝によると、宇目の矢野一族は播磨の矢野庄に起った橋氏族矢野氏の庶族で、始

祖の矢野某は越中立山の城にあったが、敵襲をうけて落城、武士をすてて熊野に入り修行した。山伏となって全国の中から山を歩いたが、建治年間豊後の宇目郷にとどまり、南田原の長者になった。そこで信仰する熊野三社権現を鷹鳥屋の山に勧請したが、一族いよいよ繁栄した。四代佐伯市長として戦後の佐伯市建設に邁進した矢野龍雄氏は宇目町重岡の人、この矢野一族である。

日田・玖珠地方の矢野氏は日田大蔵氏の支族、または玖珠清原氏の一族といわれる。清原氏の始祖正高は豊後に配流されたが、玖珠山田郷の矢野檢校久兼の女を娶り、長野・帆足・飯田・小田・魚返など玖珠二十四家の祖になった。矢野氏が清原氏一族といわれるのは、矢野久兼の名跡を立てたという伝承からである。

河野氏の分布と重なる矢野氏の系統は伊豫矢野氏であろう。次は越智姓矢野氏の略系である。



(つづく)